

【代表研究者】

村上 衛

京都大学 人文科学研究所 助手

【研究題目】

近代中国東南沿海地域の変動と華人世界の再編

【研究の目的】

近年、「アジア域内交易論」が提唱されたことにより、アジア各地域間の経済史的研究が進められ、大きな成果をあげてきた。しかし、その考察の対象は日本との関係が深い朝鮮・中国（東北・華北・上海）に偏り、歴史的に中国の対外的な窓口であり、東南アジアを中心に多くの華人を送り出してきた東南沿海の研究は乏しい。また主として 19 世紀末以降に研究が集中しており、19 世紀についての検討がなされていないため、明清時代から連続して近代の変動をとらえることが困難になっている。

本研究では、以上の課題をふまえて 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての変動期に着目する。19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての中国東南沿海は、旧来の秩序が動揺し、対外的な関係が強化されていく時期であった。本研究では、この変動期において、東アジア・東南アジアを中心として世界的に広がる福建・潮州・広東人の世界がどのように再編・形成されてきたかを明らかにすることを目的とする。

【研究の内容・方法】

本研究では、19 世紀前半、特にアヘン戦争にいたる時期の東南沿海の状況を明らかにしたうえで、主として以下の二つの課題を中心にした文献研究に取り組んだ。第一の課題は 19 世紀後半から 19 世紀末にかけて、従来の社会経済的秩序が動揺する中で、中国東南沿海部から南シナ海沿海地域にかけての秩序の再編と、華人世界の形成について明らかにすることである。具体的に取り上げたのは、第一に、中国人商人組織の問題である。19 世紀後半は、中国全体で商人組織の再編が行われたが、本研究では、中国東南沿海地域から東南アジア一帯における商人組織再編の実態を再検討する。第二に沿海部の治安の問題である。アヘン戦争後、イギリス海軍の活動によって海賊行為は鎮圧されていくが、その過程の中での各国外交官・イギリス海軍と清朝地方官及び華南沿海民の対応を考慮する。第三に移民の問題で、中南米向け「苦力貿易」の発展とその終結及び東南アジア方面への移民拡大過程の地域的差異を検討し、華人世界の再形成を明らかにする。

第一の課題をふまえた上で、第二の課題としては、1880年代から始まる世界的な経済的変動によって再編されたばかりの秩序が動揺にさらされる中で、福建・潮州・広東人がどのように対応したのかを検討する。具体的には、第一には、清末民国初期における中国人商人団体の再編成のなかで、従来からの商人組織の再編と改変がどのように進められたのかを検討をすすめた。第二には、東南アジア華人と台湾籍民と中国東南沿海部との関係を検討した。

上記の課題を達成するために国内外において漢文・中国語及び英文史料を中心として、積極的に史料収集を行った。国外では、中国・台湾にある漢文・中国文の档案類や各種文献を収集した。また上記の研究を行いつつ、国内外において海外の研究者との国際的学术交流を推進した。

【結論・考察】

本研究では、まず19世紀後半の研究を進めるうえでその前提となる、19世紀前半の状況の解明に取り組み、アヘン戦争期にいたる時期に、中国東南沿海における福建人・広東人の活動が活性化し、清朝の沿海支配が崩壊している状況を明らかにした。また、第一の課題では、先ず沿海部の治安の問題の研究を進めた。開港後、イギリス海軍の活動によってアヘン戦争後に拡大した海賊行為は鎮圧されていくが、その過程には清朝側官僚が関与しており、またこれによって東南沿海から東南アジアにおける福建人・広東人の再編が進んだことを明らかにした。さらに、商人組織の問題や、移民の問題についても検討を進めた。第二の課題としては、清末民国初期における中国人商人団体の再編成の問題として、清末におけるアヘン課税問題を取り上げ、清末において従来からの官僚と福建人・潮州人商人の関係に大きな変容がみられたことを明らかにし、またその中で東南アジア華人の果たした役割も解明した。